



学校法人
鎌倉女子大学

地に足をつけた教育を！

—教育学部の開設にあたって—

教育という仕事は、よりよい教育を求めてひたすら歩みを進める誠に地道な活動であります。それは、大向こうを唸らすイベントでも、直ちに消費される広告でも、見かけの装飾でもなく、日常活動そのものであります。そして、その日常活動を支えるものこそ、営々辛苦の末に培ったその大学のもつ伝統と実績、と同時に伝統と実績に胡座をかかない怠ることない新しい優れた教授スタッフの充当とカリキュラムの刷新に他なりません。

確かに、今日少子化の波が押し寄せ、各大学は、厳しい競争的環境におかれ、教育の特徴のアピールに鑄^{しのぎ}を削^{けず}っています。それもそのはず、四年制で40%超、短大で60%超の大学が定員割れを起こしているのが実情ですから、どこの大学も危機感を募^つらせるのは、当然といえば当然のことでしょう。

幸いに本学の定員充足率は、全学部・学科にわたって毎年100%を超えています。これも、終始教職員がそれぞれに知恵を出し合って努力を重ね、出来るだけ充実した学部・学科の編成や魅力あるカリキュラムの提供に一丸となって心がけている結果に他なりません。

このような時代だからでしょうが、最近大学に身をおく人たちが皆、浮き足立ってしまっているところがあるように思えてなりません。それを一番強く感じるのは、他でもない学部・学科の新設問題です。各大学にとって学生募集が死活問題であることは、今も申した通りのこと。しかし、そうだからといって、他学の成功事例をそのまま真似して、それまでその大学がまったく手掛けたことがなかったような分野に手を出したとしても、果たしてそれで本当によい教育が行えるものなのかどうか…。「木に竹を接ぐ」という言葉がありますが、それまで工業を教えていたところが、突然「栄養学」に手を出したり、それまで商業を教えていたところが、突然「児童学」に手を出したりと…。逆に、いくら人気がありそうな学部・学科でも、鎌倉女子大学が鎌倉女子大学の教育研究にはそぐわない法学とか工学に手を出すことは、厳に慎まなくてはならないでしょう。法学や工学を志向する学生と栄養学や児童学を志向する学生とでは、その性格も目的意識もおよそ異なるものでしょうし、そもそも法学部や工学部の学生が集うキャンパスと家政学部や児童学部の学生が集うキャンパスとでは、その雰囲気からして相当違ったものにならざるを得ないということにもなるわけです。いや、それ以前に、自分の身の丈にあわない衣装でその場を着飾ってみても、却って折角培った良質な容姿まで壊してしまうことにもなりかねず、むしろ私は、そのことの方を強く懼^{おそ}れます。

質の高い教育は、一朝一夕に行えるものではありません。質の高い教育が成り立つためには、欠かすことの出来ないいくつかの条件があります。それは、数えあげれば、次のようなものになるでしょう。即ち、その分野において、一つ、どれくらい優秀な教授スタッフを抱えているかどうか、一つ、どれくらい充実した研究情報を蓄えているかどうか、一つ、どれくらい適切な養成方法とを採っているかどうか、一つ、どれくらい手厚い施設・設備を整えているかどうか、一つ、どれくらい職域が卒業生によって開拓されているかどうか。これらの諸要素が、質の高い教育か、はたまた付け焼刃の教育かを判断する重要な指標メルクマールなのです。

新しいミレニアムに入ってより、本学も、いろいろな新しい学部・学科を先駆的に開設してきました。日本で初の「児童学部」、これもわが国で初めて18歳未満の「子ども」を主題にして心理研究を行う「子ども心理学科」、家政学と保健学をドッキングさせた「家政保健学科」と…。因みに、子ども心理学科の意図するところも、本学の開設を契機にその後ワードとして賑にぎわいを見せることになった時流の「子ども学」では決してなく、本格的な心理学研究を遂行するにはターゲットをはっきりと限定する必要があるという心理学の学問的厳密性に由来するものでありました。しかし、何れにしても、私たちが新しい計画に着手する時、いつも心がけることは、鎌倉女子大学の教育研究のアイデンティティーは何であるのかという視点であります。学祖・松本生太先生の座右の銘は、「一年を思う者は花を植える 十年を思う者は木を植える 百年を思う者は人を育てる」にありました。そのように振り返ってみるだけでも、結論は、既に明らかでありましょう。そう、人づくりの伝統こそ、本学のコア・コンピタンスなのです。

これまで鎌倉女子大学は、昭和25年に家庭科と保健科の教員養成を手掛けてより、幼稚園教諭、小学校全科、中学校（国語・社会）、高等学校（国語・地歴・公民）の各教諭、養護教諭、栄養教諭、特別支援学校教諭、学校図書館司書教諭、保育士、また教職と関連の深い博物館学芸員など、教職全般にわたる人材養成に努めてきました。また、今日の「教員免許更新制」の先取りといえる神奈川県教育委員会からの委託事業であった現職教員のための聴講生講座や研修生講座の経験も、本学の教育研究への社会的信頼を証しするものでありました。その意味で、平成21年4月の本格的な「教育学部教育学科」の始まりは、いよいよ満を持してのもの、これまでの鎌倉女子大学の教育研究の集大成といえるものなのです。

[>前のページへ戻る](#)